
ボッチ物語（連載）

uno

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボッチ物語（連載）

【Nコード】

N4073U

【作者名】

uno

【あらすじ】

ボッチを脱するための、あれやこれやの物語

1 - (1) 行動をしよう(前書き)

これは実在する人物とは全く関係ありません。フィクションです。
ですから、現実とは無関係ですよ？

1 - (1) 行動をしよう

なぜ、こんなことになってしまったのか？

大学新人生である俺は、にぎわいのある大学の食堂で一人うどんを食べながら、そんなことを思った。

周りを見れば、楽しそうに談話しながら食事をしている人が大勢いる。そんな中、俺は一人。アローンだ。

つまるところ、俺は今をときめかないボツチと呼ばれる人種。

友達どころか会話をする人もこの大学にはいない。

なぜ、こんなことになってしまったのか？

思い当たるフシはある。

大きな理由は、新人生オリエンテーションを休んでしまったからだろう。しかし、俺だって好き好んで休んだわけではない。

オリエンテーション当日、熱を出してしまったのだ。

だが、それでも大丈夫だろうとタカをくくっていた。しかし、現実是非常なりけり。熱が下がって大学に行ってみると、もうすでにクラス内にグループができていたのだ。

一度できたグループに入ることは難しい。そう、実感したのは大学に来て一週間ほどたってからだ。

授業の時も、休み時間の時も、話す機会がない。どうしたものか。しかし、それもこれまでだ。

俺には秘策がまだある。

残っていたうどんを胃の中に入れ、俺は席をたった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

まだ、建てられて数年しかたっていない大学の中には多くの人が行きかっていた。

多くの人は右も左もわからぬ一年生だが、それ以外にチラシを配っている元気な上級生がいた。

どうやら、サークルの勧誘をやっているらしい。

そう、俺の秘策は、サークルに入り、ボッチを脱することだったのだ。

そう、ほくそえみながら歩いていると、

「君、新人生？」

後ろから声をかけられた。声のしたほうに振り向くと、満面の笑みを浮かべた色白の男が立っていた。その笑顔。プライスレス。だい「はい、そうですけど」

「よかった。ところで君、絵とかに興味ある？」

開始早々なれなしいやつである。内心でそう思いつつ、こちらも笑顔で対応。ボッチを脱するためである。文句は言えない。

「絵、ですか？ 描いたりとかは苦手ですね」

自慢じゃないが、高校の時の美術の成績は2である。十段階評価で。

「大丈夫、大丈夫。初心者も大歓迎だから。ちょっとでいいからうちのサークルに見て来てみない？」

よほど、人手が足りないのだろうか？ どうしようか。人が少ないサークルだと、ボッチになる可能性が出てくるのではないだろうか？

「あ、はい。ちょっとだけなら」

しかし、文句を言っている立場じゃない。様子見ぐらいしてみるのが重要である。

「じゃあ、今日ここに書かれた場所に来てくれる？」

差し出されたチラシを受け取り、ざっと見る。そのチラシの真ん中には「アニメッ！！」て感じの絵が描かれており、下のほうにサークルの活動場所が書かれていた。

そして、一番上にはアニメ漫画同好会と書かれている。

アニメ漫画同好会。オタク系サークルか……。なんか一気に冷め

たわ。

「ハイ、わかりました。じゃあ、これで」

逃げるようにそこを後にする。オタクと係わるのはちょっと抵抗がある。なんか、自分の世界に入っていて、あまり話がかみ合わない。そんなイメージが、俺をそうさせたのかもしれない。

かくして、いくつかのサークルのチラシをもらい、次の授業の教室に向かった。

さてどうしたものか？ 悩みどころである。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

午後の授業、後ろの席。微分方程式の話を無視して昼間もらったチラシを机の上にならべ、眺めていた。

もらったチラシの数は全部で5枚。

一枚目はワンダーホーゲル部。山を登ったり、体を鍛えたりするサークルらしい。正直、自分には無理だ。階段を上るだけで息が上がる俺がやったら死んでしまいそうである。

それに、つらいのは嫌いだ。できるなら楽ができるサークルがいい。

「却下だ」

ワンダーホーゲル部のチラシをカバンの中にしまう。

二枚目は滑空研究会。エンジンのついていない、グライダーという飛行機を作り、空へ飛ばすサークルだという。また、鳥人間コンテストにも参加しているらしく、結構有名らしい。だが、特に、空にも飛行機にも思い入れがないし、興味もない。どうでもいいというのが、今の感想である。

「保留しよう」

滑空研究会のチラシを横に置いた。

三枚目は、黒魔術同好会。魔法や魔術などを学ぶサークルのよう
だ。工学部の人間がなにやっているのだ？ と、あきれてしまう。
もう厨二病は卒業しろよ。

「入部は絶対無理だな」

黒魔術同好会のチラシをカバンの奥底にしまっておく。もう、見
ることなかれ。

四枚目は写真部。写真を撮ったりするサークルで、なんでもコン
テストなどにも出展し、賞ももらった事があるとか。なかなかいい
感じである。それに写真を撮るだけなら、自分にもできそうだ。し
かし、写真をとるためのカメラがない。そして、カメラを買うお金
もない。カメラの貸し出しはしているのだろうか？ もしくは、イ
ンスタントカメラでもいいだろうか？

「これは聞いてみないとな……」

写真部のチラシを滑空研究会のチラシの上に乗せてる。

そして最後のチラシはアニメ漫画同好会。文字どおり、漫画やア
ニメなどを見たり、描いたりするサークル。正直、微妙だ。しかし、
行くと言った手前、行かなければ道理に反する。

それに、今日ちょっと見ていくだけでいいんだし。

「とりあえず今日はこれだな」

写真部と滑空研究会のチラシと一緒にまとめ、カバンのすぐ取り
出せる場所に入れておく。これで、授業が終わったらすぐ行ける。
一通りの作業が終わり、授業を真面目にうけるため、前を見る。
すると、よばよばな教授が黒板に書かれていた板書をサーっと消し
ていく。

まあ、誰かにノートを借りればいいや。ってあれ？

「ノートを貸してくれる友達がいないじゃないか」

絶望感がハンパない。

と、まあこんな感じで午後の授業が終了。

だが、気落ちしている場合ではない。これから、大事なのだか
ら。

[illegible]

1 - (1) 行動をしよう(後書き)

つたない作品ですが見てくれてありがとうございます。

あと、このサイトの機能を作者がよく理解していないせいで、変な間違いをすることが多いかと思いますが、暖かい目で見てください。
おねがいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4073u/>

ボッチ物語（連載）

2011年6月27日15時40分発行